

お天気メソッド その2

天気予報を使った言語指導と感性の教育 各教科等への発展的扱いに関する実践等～

小学部 山本 晃

《研究の概要》 毎朝の天気予報で気象予報士・気象キャスターが話している言葉や言い回しは、児童には是非教えたようなものが多い。さらにそれらの話の中には季節感や生活に密着した話題がたくさん含まれている。朝聞いた天気予報を、その日のうちにタイムリーに子どもたちに伝え、その話に合った天気を一日感じることによって、四季を通じたこれらのことばや言い回しを理解したり、季節感等を学ぶことができる。つまりお天気メソッドは生活に根ざしたことばを身に付ける一方法である。本報告は、2008年の本校研究紀要の報告の続編であり、ここ4年間の日々の実践を、各教科等への発展的扱いに関する実践をも例に出して報告したい。

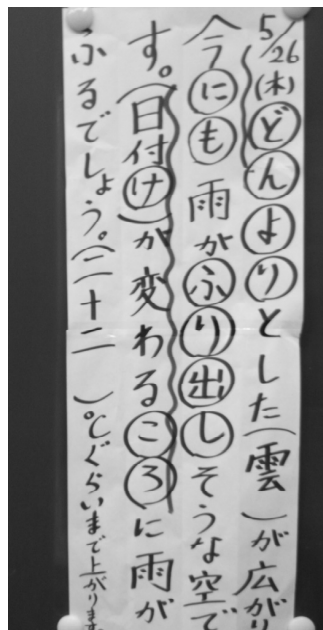
【キーワード】 天気予報 言語指導 季節感 総合的な学習

1 はじめに

聴覚に障害のある子どもは、日常生活の中からことばを覚え、それを適切な場面で使う力を身に付けることが困難である。物の名前（名詞）は実体と、その名前を一对にできるので覚えやすいが、物の性質・状態等を表わす形容詞や、より内容を詳しくする副詞などは子どもの生活や経験の中から次第に身に付けさせていく必要がある。

このような指導をより身近なことから、より効果的に身に付ける方法としてこれまで「絵日記指導」なども用いられてきたが、小学部児童を対象とした指導として、気象予報士が話す天気予報や天気に関する話を言語指導に取り込んでみた。

私の学級（小学部低学年）では、毎朝、その日の天気を5分から10分程度扱っている。具体的には、テレビの天気予報で気象予報士・気象キャスターが話した内容を要約し、黒板に貼って、内容についてやりとりを行っている。通常黒板の右はしに、日付けや曜日、



日直、天気を書くが、その『天気 晴れ』等と書くところを3、4行程度の文を紙に書き、一日中貼っておく。例えば、「どんよりとした雲が広がり、今にも雨がふり出しそうな空です。日付けが変わるころに雨がふるでしょう。二十二℃ぐらいまで上がります」等である。このような話を毎朝扱い、教科書には出てこないが、知っておきたいことばの指導や、季節感や感性を身に付けさせる活動を行っている。

2 お天気の話の扱い方



私は毎朝の天気予報を見て、気象予報士・気象キャスターが話したことの中から、晴れ時々曇り等、最高気温をはじめとし、「しだいに雲がふえます。」「～～という天気なので、～～したほうがいいでしょう。」「と言ったことを中心にメモを取り、学校でB4、2枚の裏紙に書いている。その時、子どもに答えさせたいことばを〇〇〇や（ ）とあけておく。そして朝の会で、子ども達と話し合いながら〇〇〇や（ ）にことばを入れ、話を完成させていく。最後は、書いてあることをイメージさせながら、

8 お天気メソッド その2

発音に気をつけさせながら音読させている。(発音の練習を兼ねている) また時間があるときや週末の

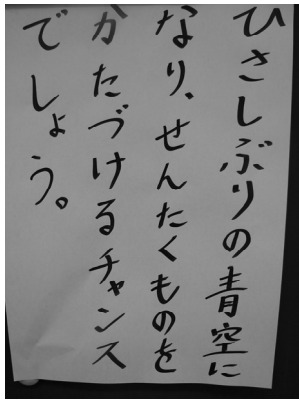
宿題で、お天気の話からイメージする絵を描かせることも行っている。

実際のお天気メソッドの話し合い (例)

発問	児童の反応	発問の意図
「お天気の話をしてしましよう？」 「今日は、何が広がるのかな？」 「どんな雲がひろがるのかな？」 「どんよりした雲ってどんな雲かなあ？」 「だから、どんな空なのかな？」 「みんなはかさをもってきたかな？」 「雨がふるのはいつごろだと思う？」 「日付けが変わるころって何時ごろかな？」 「今日は、何度ぐらいまであがるの？ さい高気温は？」 「発音に気をつけて読みましょう。」	「はい。」 「雲が広がる。」 「どんよりとした雲がひろがる。」 「灰色の、今にも雨を降らせそうな雲かな。重苦しく感じるような雲。」 「今にも雨がふり出しそうな空。」 「お母さんに持って行ったらと言われたのもってきた。」 「日付けが変わるころ。」 「夜中の12時。」 「ぼくのお父さん、日付けが変わるころに帰ってくることがある。」 「22度ぐらいまで上がる。」 「どんよりとした雲が広がり、今にも雨がふり出しそうな空です。日付けが変わるころに雨がふるでしょう。22℃ぐらいまで上がります。」	・朝、家庭で家の人とお天気の話をして少しでもいいのでしているかどうかを見るための簡単な発問。 ・「どんよりとした雲」というのは、空模様を表す一つの表現であり、それがわかってきたかを見る発問。 ・空模様を自分のことばで説明できる力を鍛える発問。 ・「今にも」という副詞に慣れさせるはたらきかけ。(クラスの中に、このような言葉を使える子どもがいるため。) ・今日のような天気だから、みんなはどうしたのかと、自分たちの生活と密着させることをねらう発問。 ・算数で学習した、1日がいつからいつまでということが理解できているかどうかを確認する発問。 ・だいたいの暖かさ、暑さを確認させる発問。 ・朝、発音に気をつけさせる働きかけをすることにより、1日の学校生活の上でも発音を気にする習慣をつけるための働きかけ。

3 事例

①「ひさしぶりの青空になり、せんたくものをかたづけるチャンスでしょう。」



子どもたちにこの文からイメージした絵を描かせた。すると、2つのグループに分かれた。一方は「せんたくもの」「かたづける」というキーワードから、干した洗濯物を取り込む（片付ける）という絵を描いた子ども達、もう一方は洗濯物を干している絵を描いた子ども達である。前者の子ども達は、特に「片付ける」のことばに反応し、洗濯物を取り込む絵を描いたが、この子ども達はこの話が理解できているとは言い難い。後者の絵を描いた子ども達に、「この子は何をしているの？」という問いかけをしたところ、「やっと晴れて洗濯ができたから、洗濯物を洗って干している。」と答えた。この子どもたちは、「洗濯物をかたづける」を、たまった洗濯物を洗濯し、干すという、一連の流れでしっかり理解できていた。



授業者のねらいとしては、たまった洗濯物を洗って干す状況をわかった上で、たまった洗濯物を隙間なく、たくさん干しているような絵を描くと良いと

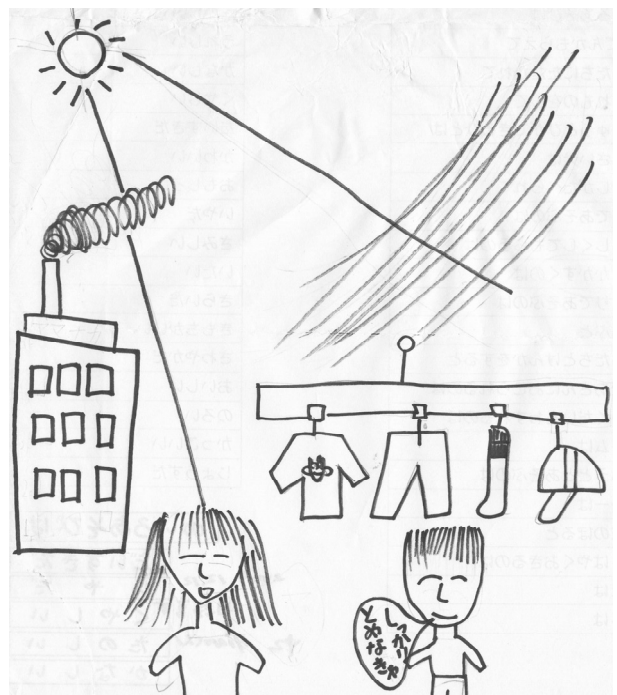
考えていたが、後者の子ども達は、ほぼこれに近い絵を描くことができた。この子ども達は、この場面での「かたづける」ということばの意味を正しく捉えていたと言える。

②「きょうは1日中雨です。午前中はふったりやんだり、昼すぎから雨が強くなり、夜九時ごろピークをむかえるでしょう。」

これはお天気マークで言えば、傘マーク一つであるが、この文の中には時間の経過と共に降り方が表わされている。子ども達に「雨の降り方を手の動きと声で表現してみましょう。」と言ったところ、経時的な降り方の違いについて、理解できていた。お天気としては雨という一言で済んでしまいがちであるが、雨の降り方を考えさせることで、様々な雨を、ことばで押さえることができるのではないかと考えられる。

③（理科の学習への発展）

「きょうは日ざしたっぷりで、せんたく日よりでしょう。ただ北風がつよく、えんとつからのけむりは、ま横にたなびくでしょう。せんたくものはしっかりとめたほうがいいでしょう。」



この話についても、イメージする絵を描かせた。

こちらからは描く前に「風、えんとつから出るけむり、人、せんたくものがほしてあるようす、ふきだしはかならずかいてね。」と話した。子ども達が描いた絵を見ると、様々な絵があった。教科書にはなかなか出てこない「たなびく」の意味がわからなかった子どもも何人もいた。ある児童は風がきちんと描いてあり、煙がだいたい横にたなびいている絵を描いていたのは良かったが、風と煙の向きが合っていなかった。

「煙はどちらからふいているの？」

このように尋ねると、児童は風の向きと、煙のたなびいている向きが矛盾していることに気づいた。さらに全員に、

「つよい北風が吹いているんだよねえ。風が洗濯物に当たると、どうなるのかなあ。」

と問いかけたところ、多くの児童がはじめてそこで、風が当たると、洗濯物が揺れるということに気がついた。このようなことはわかっているようでも、文字だけの情報からイメージするのは容易ではないことが理解できる。

④（理科の学習への発展）

「晴れのちくもりです。うららかな南風が吹きます。風速8メートルをすぎると、春一番の発表があります。日中は19度まで上がります。」

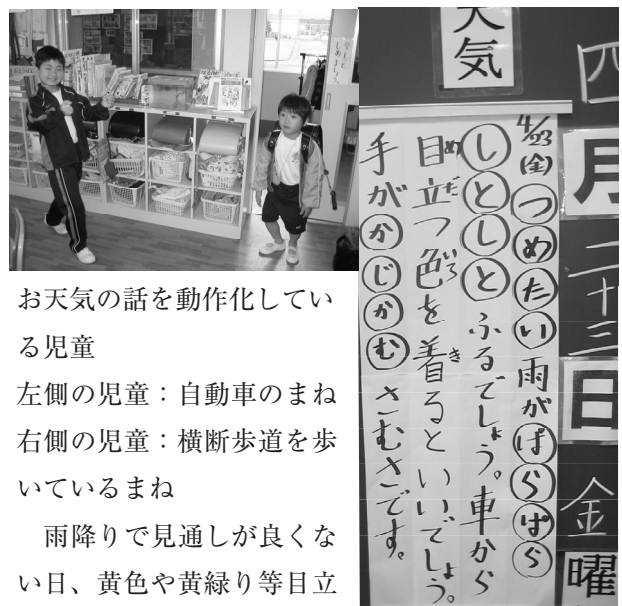


これは春一番の話である。春の足音を感じさせる「春一番が吹く」ということを天気予報では伝えるが、春一番にせよ、木枯らし一号にせよ、このようなことを意識することによって季節感が子どもにも芽生えると思う。しかも気象キャスターは、「地

上10メートルの高さのところを秒速8メートル以上の強風が吹いたら」という春一番の定義にまで触れていた。親の方もただ単にあたたかい強い風と思っているところ、ここに高さ、秒速、方向が入ることにより、「春一番」というものが具体的に理解できてくるのではないかと思う。低学年ではこのような詳しい知識は必要ないと思うが、高学年では理科や算数の学習とも結び付くのではないかと考える。左下の絵は児童が描いた絵であるが、実際に春一番が吹いた場面で、朝の天気予報の話を思い出したようである。また強風のためにいろんな物が飛んできたり、髪の毛も乱れているのがわかる。多分この児童は、天気の話から絵を描く経験を積んできたので、ここまで描けているが、なかなか初めてはこのような感性は持ちにくいのではないかと考える。

⑤（安全教育への発展）

「つめたい雨がぱらぱらしとしとふるでしょう。車から目立つ色を着るといいでしょう。手がかじかむさむさです。」



お天気の話を動作化している児童

左側の児童：自動車のまね
右側の児童：横断歩道を歩いているまね

雨降りで見通しが良くない日、黄色や黄緑り等目立つ服を着ていれば車から見

やすく安全である。このような感覚は教えなければわかりにく感覚である。子どもたちは動作化もして、登下校時の心構えについて学べるのではないかと考える。



⑥（保健体育の学習への発展）

「午前中はよく晴れますが、午後はきよく地的ににわか雨がふるかもしれません。今日は気温が上がり、熱中症のきけんレベルです。洗たく、そうじ、買い物、草取りをしている時など、気をつけましょう。」

これは、学級指導並びに保健で学習する「健康」に関する話とつながります。話をした後、子ども達に絵を描かせたところ、文章に合った絵を描くと同時に「日がさがかかせないわ。」「水分をとらなくっちゃ。」「ひんやりベルトをしよう。」「風とおしをよくしよう。」等熱中症対策をも吹き出しに書いた子どもが何人もいた。

⑦（社会科の学習への発展）

「寒いひなまつりです。晴れのちくもりです。まさに真冬並みの寒さです。関東北部は、朝氷点下の気温でした。北海道の札幌では雪が66センチメートルもつもっています。」

「石川、新潟、富山では大雪けいほうが出ています。」

新潟では229センチメートルつもっているところもあります。冷蔵庫に入っているような寒さです。」

本校は、関東南部の学校であるが、同じ寒い日でも関東北部、北陸さらに北海道に目を向け、寒い地方のくらしを考える学習としても発展させることができた。雪の積もり具合など、学校が位置する市川市と北国では大きな違いがあることを明確にさせることができた。



⑧（算数の学習への発展）

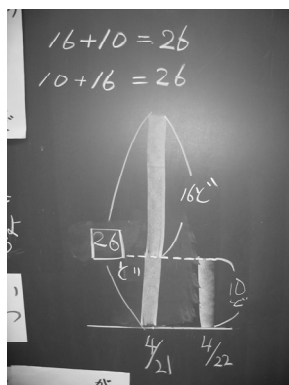
「雨です。つめたい雨となります。きのうは夏日

12 お天気メソッド その2

でしたが、きょうはきのうより16℃ひくい10℃です。

このような話の時は、きのうと今日の気温の棒グラフをかくようにした。「きのうは何度だったんだろう。」

という問いかけをして、



10 + 16 = 26と立式できる子どもは少ない。またこの課題を本校の高学年の学級でも出してもらった。すると高学年でも手こずる児童が少なくないことが明らかになった。算数の問題集等で、

「A子さんはB子さんにあめを16こあげたので、10個になりました。A子さんは最初あめをいくつ持っていましたか。」

と類似する問題であるが、なかなかこのような課題は、情報をきちんと整理して数的処理をする活動で、容易とは言えない課題である。

⑨ (英語の学習への発展)

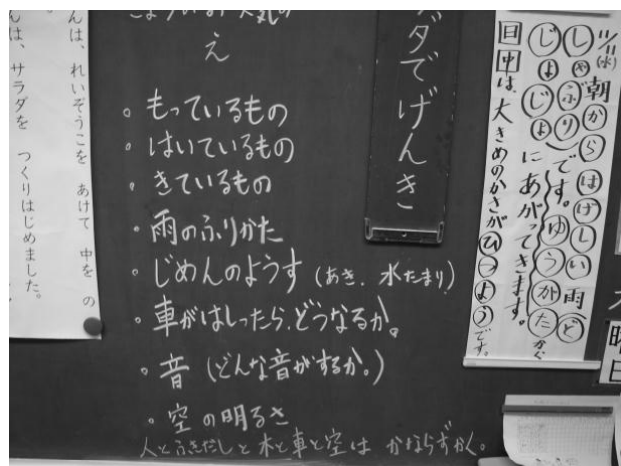
「一日くもりです。北よりのつめたいしめった風がふきます。夏から秋へ空気がチェンジします。」

「秋晴れです。クリアーな青空です。日差しが強く、
日がさがひつようです。27℃まで上がります。」

「・・・昼間はスプリングコート、夜は冬もののコートがいいでしょう。」

「季節が3ヶ月ぐらいバックした感じです。5℃です。」

本校小学部では、5、6年生で英語を総合的な学習の時間に学習するが、日本の日常生活に自然に使われる英語もお天気の話から学ぶことができる。「チェンジ」(変わる)というのは、学校生活でも「ドッジボールのコートチェンジしましょう。」等とよく使っている。「クリアー」は文房具の「クリアーファイル」「クリアーケース」等で使っている。また「スプリング」という季節を表す英単語も早い時期に知っておく必要があるものと考えられる。また「バック」というのも、「車がバックします。」、野球で「バックしてフライを捕った。」等よく使われる



英語である。

⑩ (ことば『副詞 (類義語)』の学習への発展)

「朝からはげしい雨（どしゃぶり）です。夕方から
じょじょにあがってきます。日中は大きめのかさが
ひつようです。」

「日中はしだいに青空が広がってきそうです。風の強いじょうたいは、まだしばらくつづきそうです。午後はあたたかいです。」

「くもりのち雨です。午後から雨がふり出します。
だんだん雨が本ぶりになります。17℃です。ゴール
デンウィークの天気は晴れです。」

「晴れときどきくもりです。19℃まであがります。
日ざしがけっこう強くまぶしいです。ゴールデンウ
イークぜんはんは晴れるでしょう。」

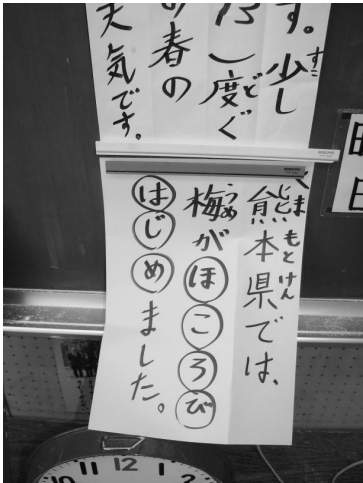
「先週にくらべるとずいぶんあたたかく感じそうです。」

「日ざしがあっても、風はつめたいです。16℃です。
あしたはさらにひくくなります。」

お天気の話の中には副詞が多く使われるが、その中でも類義語として「じょじょに」「しだいに」「だんだん」また「けっこう」「ずいぶん」「さらに」等が使われる。ひとつの事象に対して、様々な言葉を身に付けるためにも、このような言葉に触れるのは大切なことである。

なお、上記写真の中の言葉は、このお天気の話に合う絵を描くよう指示したときのヒントである。

⑪ (理科と社会科の学習への発展)



「熊本県では梅がほころびはじめました。」

「亀戸天神では、梅の花が見ごろです。」

「ソメイヨシノの開花が少し遅れそうです。3月29日ごろ開花予定です。お花見がまちどおしいです。」

「岐阜県の高山では、春のおとずれを感じさせるふきのとうがめぶいています。」

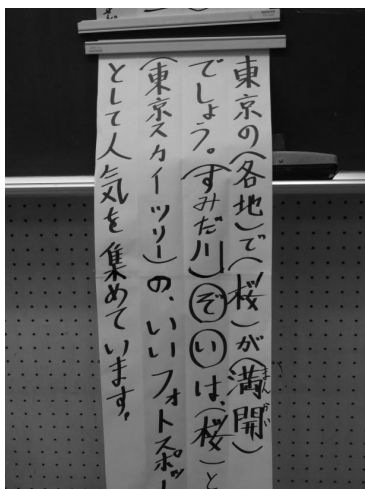
「松戸市の本土寺は、紅葉が見ごろです。」

「神奈川県横浜市の山下公園ではイチョウ並木が黄色く色づいています。」

「熊本県では秋の足音を感じさせるくりのしゅうかくが始まっています。」

「今週末が東京のソメイヨシノの見ごろです。」

「東京の各地で桜が満開でしょう。すみだ川ぞいは、桜と東京スカイツリーのいいフォトスポットとして人気を集めています。」



このように、こういう時期に、こういう場所で、こういう花が咲いている、こういうものが実っているという話は季節のもの、旬のものを理解させるの

に役立つ。

また次のような事例もあった。

「東京の都心ではイチョウが色づき始めました。」

このような話をもとに絵を描かせると、6人中4人の子どもは、黄色くなったイチョウを描いたり、中には銀杏を描く児童もいた。イチョウに銀杏と言えなさずがとも思えるが、2人の子どもは、「色づき始めました。」

という言葉をよく読んでおり、前の4人とは少し異なる絵を描いた。つまり、緑の葉っぱが黄色になりかかっているということを理解し、黄緑色の葉っぱを描いたり、緑の葉や黄色の葉を混ぜて描いていた。話の最後に全員で絵の評価をし合い、前者の4人も感心していたことがあった。

⑫ (理科の学習への発展)

「秋の深まりを感じます。アキアカネがとんでいたり、エンマコオロギが鳴いていたりします。」



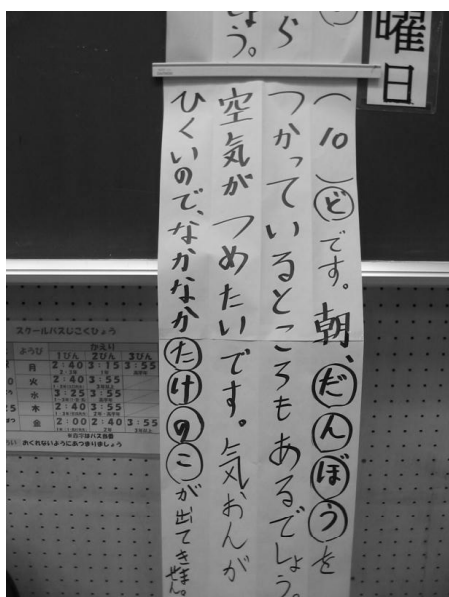
この例にあるようにアキアカネがとんでいたり、エンマコオロギが鳴いていることから秋の深まりを感じるという話である。子どもによってはなかなか昆虫などに興味をも持たない子どももいるので、

このように意識させることは有効である。また耳が聞こえにくいということで、コオロギは「コロコロリー」、すずむしは「リーン リーン」まつむしは「チロチロリン」等と理解していない子どもも多くいる。このようなことが話し合える機会にもなる。さらに虫になってみようと声を出させ、動作化させることで印象強くさせるようにした。



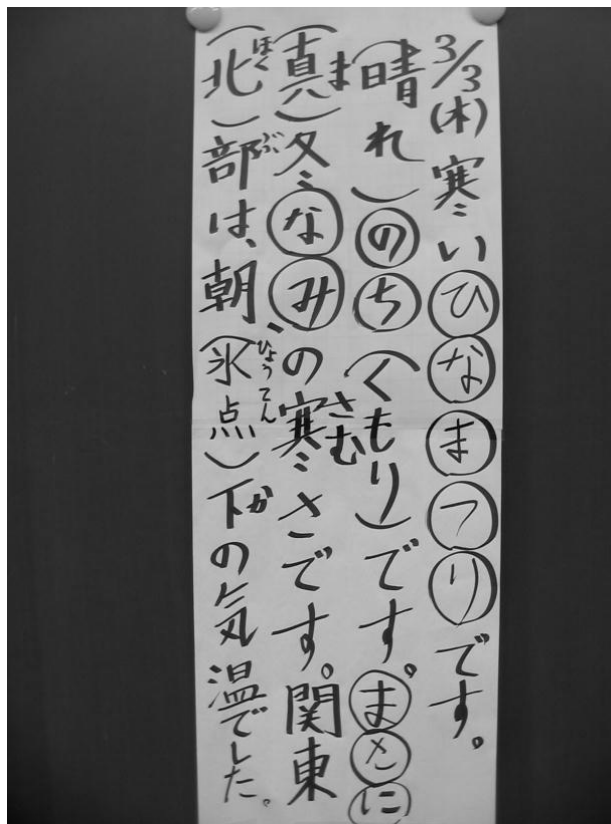
また、
「気温が低いので、なかなかたけのこが出てきません。」

という話からは、本来春になれば、また春が近づけばたけのこが生えてくるのに、まだ寒いので、旬のたけのこがまだ生えてこないという話もできる。



⑬（理科の学習・社会の学習・ことばの学習への発展）

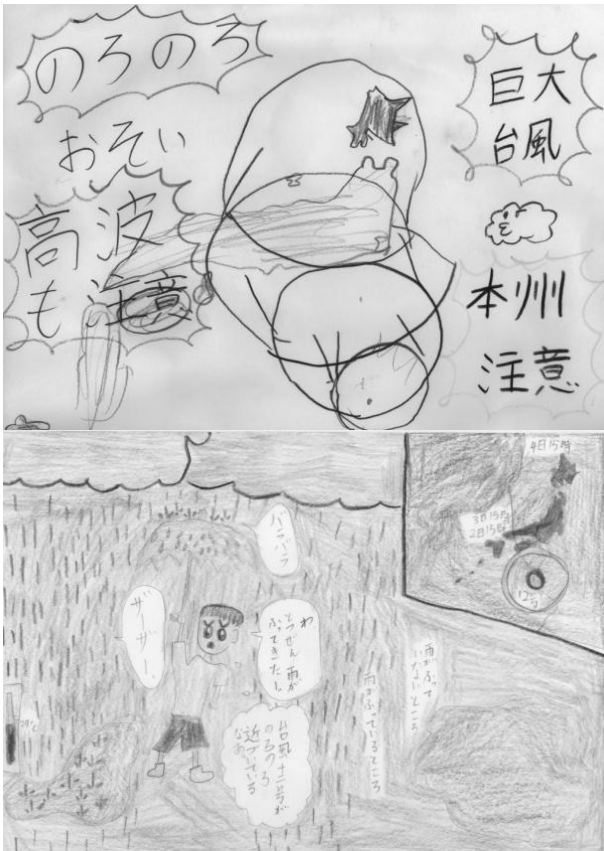
「まさに真冬なみの寒さです。関東北部は、朝氷点下の気温でした。」



この話にもいくつかのポイントがある。それは以下のような点である。

- ・3月3日はひなまつりであることを確認。
→ひなまつりの話への発展ができる。
- ・「まさに」ということばの用法が学べる。
→なかなか日常会話や「教科書に出てこない「まさに」をどんな時に使うか話ができる。
例：まさに天気予報どおりの青空だ。
- ・関東北部と南部の気候の違いが話題にできる。
→関東地方の中でも天気は異なる話ができる。
- ・氷点下の気温とは何度ぐらいのことが話題にできる。
→水は0℃で凍ることなど、通常なかなか自分達の暮らしでは経験しない気温についても話せる。

⑭（理科の学習・ことば「擬態語・擬音語」への発展）「のろのろ台風が近づいています。とつぜんの雨に注意してください。」



この話は9月1日の話であるが、まさに9月は台風の季節であるという象徴的な話である。そして台風の進むスピードにも触れていて、ゆっくり進むというのを「のろのろ」という言葉を使っている。子どもたちは、電車や人の動きだけではないことでも「のろのろ」ということばを使うことがあるということを知ることができる。

⑯（安全教育への発展）

「大型で強い台風6号が今夜上陸しそうです。海のレジャーはひかえて下さい。暑さは少しやわらぎます。」

地震の後の津波にも関係しているが、台風が近づくというのは雨や風が強まるだけでなく、海が荒れることを認識する機会になる。そのような理由で、海のレジャーを控えた方がいいということになる。「海のレジャーってどんなこと？」という話し合いにも発展できる。

⑯（理科の学習への発展）

「まさに真冬なみの寒さです。関東北部は、朝氷点下の気温でした。」

「ふもとは、19℃ですが、富士山頂はマイナス13℃です。」

「日中は16℃まで上がります。4月上旬並みのあたたかさです。朝晩の気温差が大きいので、ぬぎきしやすいかっこうがいいでしょう。」

上記に記した3つのお天気の話は、気温差がある例の典型的な例である。それは上から、

- ・地域の違いによる気温差
- ・土地の高さのによる気温差
- ・朝と晩の気温差

である。このように様々な条件による気温差があることを意識させることもできる。

4 発展的な取り組み

小学3年生ともなると、これまで朝の会で話し合った知識や感覚をもとに、子どもが、朝の天気予報や朝の空の様子を見て、お天気の話を作れるようになってくる。

「気象予報士になってみよう！」

ということで、生活に密着した天気の話を作った。この日は、風が強い日で、冷える冬の日であった。

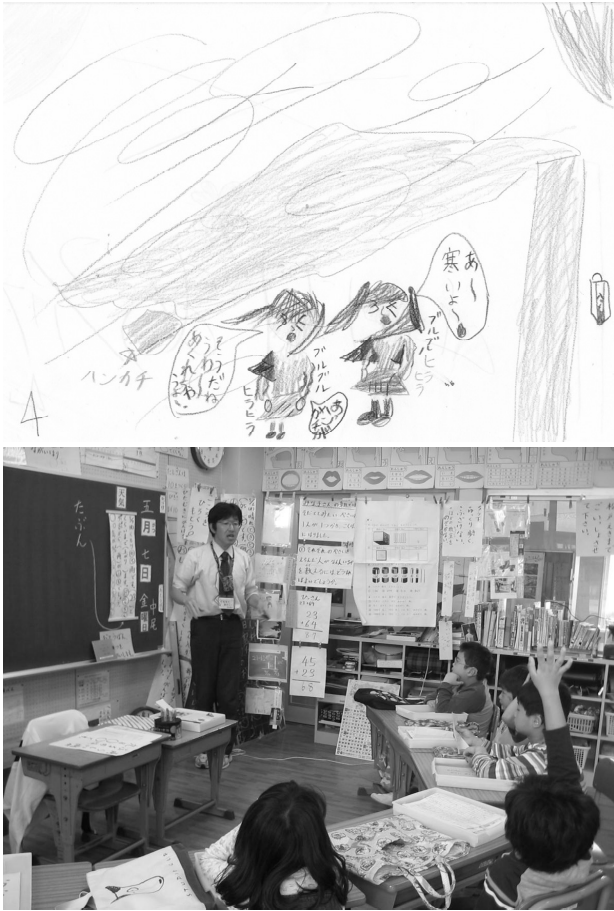
Aさんのつくった天気予報

「今日は晴れですが、風がそうとう強いでしょう。とくに女性はスカートがめくれあがらないように気をつけましょう。電柱とか木にぶつからないように気をつけましょう。」

Bくんがつくった天気予報

「晴れですが、北風が強く、ぼうしをかぶっている人は、とくに ぼうしがとばされないように気をつけましょう。」

このようにそれぞれが、今まで習ったフレーズを使い、風が強いから何々しましょうと話を考えていた。この時も書き上がったら学級全体のそれぞれの文を見合い、良いところを評価し合った。そのようにすることによって書く力についても、鍛えることができる。と考える。



5 おわりに

私は提示する文章を、三・四行の文章にしているが、長い文ではなく一行で、例えば「はれたりくもったりの一日」「どんよりしていてむし暑い1日」のように少し変えてみるだけでも良いのではないかと思う。「天気 晴れ」「天気 くもり」等の表現を少し変えてみるような取り組みによって、少しずつ言語力と感性が磨かれていくことと思う。

一昨年の夏、ある聾学校でお天気メソッドの授業を行う機会があった。幼稚部の年長から小学部6年生までの10名程度で一斉授業を行ったが、一人ひとりのことばの力や生活経験は異なるものの、ある夏の一日の天気の話について、みんなで話し合うことができた。子ども達の様子を見ていて、お天気の話という題材は幅広く子ども達に受け入れられやすいものだ実感した。

ここで紹介した「お天気メソッド」は聾学校だけでなく、おそらく普通小学校でも十分に使えるものだと考えている。教師は子どもの生活にも目を向け、子どものものの捉え方や感じ方に気を配る必要がある。朝の短い時間での「天気予報」の扱いの中に、子どもに身につけさせたいことばや言い回しを見つけ学習させる。そのような意識の積み重ねが子どもの確かなことばの獲得につながると考える。

